

追い出されたら、上手く いかまして

OIDASARETARA
NANIKATO UHAKU
IKIMASHITE

何
かと

6



Yukizuka Yuzu

雪塚ゆず

Illustration 福きつね

ユリーカ

アレクの同級生で、
しっかり者の優等生。
召喚獣：オルタス

ライアン

アレクの同級生で、
元気いっぱいな少年。
召喚獣：タイショ

シオン

アレクの同級生で、
恥ずかしがり屋。
召喚獣：スキャリー

ガディ

双子のエルルと同じく、
SSSランク冒険者。
弟のアレクを溺愛している。

エルル

SSSランクの凄腕冒険者で、
ガディとは双子。
弟のアレクを溺愛している。

エルミア

かつてトリティカーナ王国^{きやうち}の窮地を救った
英雄。アレク同様、紫の髪と瞳を持つ。

ウィルフィルム

エルミアが護衛する、
トリティカーナ王国の第二王子。
心優しい性格。

アレク

紫色の髪と瞳を持つ、
本作の主人公。
学園生活を満喫中。
「天使」の伝承と、
先祖エルミアに
ついて調べている。
召喚獣：リル

クルミ

集落の長老の孫で、
優しい雰囲気少女。
アユムの親友。

ヒノメ

アユム

故郷の集落を魔物から
救うため、救世主を
探している少女。

イサク

トリティカーナ王国の
四代目騎士団長。
エルミアの師匠でもある。

第一話 アユム

十歳の頃、英雄ムーンオルト家を追放されてしまったアレク。けれど思いがけない出会いがきっかけで、素性を伏せ、トリティカーナ王国の英雄学園に通うこととなった。

両親に疎まれた紫の髪と瞳は魔法で金色に変えて、今はアレク・サルトを名乗っている。

アレクを英雄学園に誘ってくれた先輩達——リリーナとティールの卒業式も無事終わり、学園は冬休みに突入した。

休暇中、大体の生徒は実家に帰省するのだが、アレクには帰る家がない。そこで休みの間も、引き続き学園の寮で過ごすことにした。

同室であったリリーナとティールが卒業したため、この冬休みから、双子のきょうだいガディとエルルが同じ部屋となった。

そして、冬休み初日の夜。

「アレク、お姉ちゃんと一緒に寝ましょう」

「いや、遠慮しとく」

「じゃあ、この兄と」

「僕、一人で寝られるよ」

同じ部屋になりテンションが上がった姉と兄に対し、アレクは躊躇なく告げた。こうもばつさり切り捨てられてしまえば、二人は揃って嘔り泣くしかない。

弟の成長とは思いのほか早いもので、少し目を離れた隙に大人びているものだ。……だとしても、寂しいものは寂しい。

「お姉ちゃん、干からびちゃうわ……」

「俺も……」

「はいはい」

そんな二人の対応には慣れっこなアレクは、適当にあしらひ、布団に潜り込んだのだった。



冬休みが始まって一週間。

課題をこなしたり、召喚獣達と戯れたり、アレクは充実した休暇を送っていた。

今日は、帰省を終えた同級生のライアン、ユリーカ、シオンと遊びに行く日だ。

休暇に入る前、ペンケースを落として定規を割ってしまったシオン。そんな彼女のために、まずは雑貨屋へ行く予定である。

久々に早起きをしたアレクは、ベッドから起き上がった。

昨晚もアレクにつれない反応をされ、いじめていた双子は、まだ布団にくるまって眠っている。

二人を起こさないように気をつけつつ、アレクは手早く準備を終えた。

「行ってきます」

挨拶は大切だ。ガディとエルルに向かってそっと声をかけ、アレクは部屋をあとにした。

それからしんと静まり返った廊下を進み、寮の扉に手をかける。

「よっ！」

「え、ライアン？」

扉を開けた瞬間、目の前にライアンが立っていたため、アレクは目を丸くした。今日の待ち合わせ場所は、寮ではない。

「早く目が覚めたから、迎えに行こうと思って！」

「ずっと待っていてくれたの？」

「まさか！ 着いたばかりだぜ」

そうは言うものの、ライアンの鼻先や耳は赤く染まっている。

この寒さの中、アレクを待っていてくれたのだと思うと、嬉しさが頬が緩んだ。

「そっか。ありがとう」

「おう！」

アレクとライアンは世間話をしつつ、待ち合わせ場所へと向かう。

「でさあ、父さんったらさ。俺が四代目騎士団長の剣を触ろうとしたら、『触るんじゃねえ、バカ

息子!! 手垢がつくだろ!!」なんつって、拳骨かましてきやがつて!」

「あはははっ。触っちゃいけないやつだったんじゃないの?」

「だとしてもよお、触つてみたかったんだよ!」

「懂れのご先祖様だし?」

「そおなんだよ!」

他愛もない会話だが、ライアンといると、どんな話でも面白い。

クスクス笑っていると、「笑うなよ〜!」とライアンが恥ずかしそうに叫んだ。

「だって、俺らの家系から出た数少ない英雄だぞ!? 懂れもするよ!」

「英雄か〜。確かにカッコいいよね」

「アレクは、英雄の中で誰が好きなんだ? 俺はもちろん四代目騎士団長だ!」

「うーん、あんまり知らないんだよね」

そもそも興味がなかったため、好きな英雄と言われてもパツと思いつかない。

強いて言うとする――

「やっぱ、有名なのはエルミア様だよな」

ライアンの口から出た名前は、ちょうどアレクが思い浮かべた名前と同じだった。

エルミアは、アレクの先祖でもあるとても有名な英雄だ。アレク同様、紫の髪と瞳を持ち、世界に絶大な影響を与えて英雄と呼ばれるようになったという。

しかし、彼女にまつわる情報は非常に少なく、謎に包まれた存在だ。子孫であるアレクですら、

詳しくは知らない。

「エルミア様と四代目騎士団長は師弟関係だったらしいし、俺の家に文献とか残ってねえかな」

「! 確かに。僕、気になるな」

「じゃあ、今度探してみようぜ」

そうこうしているうちに、アレクとライアンは待ち合わせ場所に到着した。

ユリーカとシオンを待つが、二人はなかなか現れない。

約束の時間から二十分ほどが経ち、流石にライアンとアレクは首を捻った。

「二人揃って遅れるなんて……何かあったのか?」

「大丈夫かな……怪我したりとか、してないかな」

不安に思い、その場をうろうろと歩き回るが、連絡手段を持たないゆえにどうすることもできない。

しびれを切らして探しに行こうと決めたその時、ようやくユリーカが現れた。

「遅れてごめんなさい!」

元氣そうなユリーカを見て、アレクもライアンもひとまずホッと息をつく。

「ユリーカ! どうしたの、遅かったね。シオンも、まだ来てないんだ」

「ちよっと……ついてきてもらっていい?」

そう言ったユリーカは、何やら神妙な面差しだった。

ユリーカに案内された先は、ごく普通の一軒家だった。ドアをノックして入ると、家主らしき男が出てくる。

「ああ、お友達？」

「はい。ご迷惑をおかけしてしまい、すみません」

「いやいや、構わないよ。あの子は、まだ眠っているみたいだ」

会話の意味がわからず、アレクとライアンがポカンとしてみると、ユリーカが二人を奥の部屋に促す。そこには、ベッドに横たわった見知らぬ少女と、そのすぐそばで心配そうな表情を浮かべるシオンの姿があった。

「えっと……何があったの？」

アレクの問いかけに、シオンが困った様子で口を開く。

「あのね、ユリーカと一緒に待ち合わせ場所に行こうとしたんだけど……この子が道で倒れてて。このお家の人と協力して、ここまで連れてきたんだ」

「さっきお医者さんが来て診察してくれたんだけど……脱水症状だつて」

少女の腕からは点滴の管が伸びており、顔色もすこぶる悪い。

アレクは、ベッドに横たわるその少女を改めて観察した。

裾の長い外套がいてうのような衣服には、赤い糸で見事な刺繍ししゅうが施ほどこされている。これまで目にしたことのない、変わった格好だ。

顔立ちはやや幼く、少し癖のある短髪から少年のようにも見える。髪の色が黒いので、東部の出身かもしれない。東のダンカート王国から来たのだろうか。

「……………」

その時、少女の目がパチリと開いた。明るい緑色の瞳を瞬またたかせて、アレク達のことを凝視する。

「ここは……どこだ？」

「わっ、起きた」

「ここは、トリティカーナ王国の王都、ナハールだよ」

「トリティカーナ……ナハール？」

少女は混乱した様子で、アレクの言葉を復唱する。まさか、トリティカーナを知らないのだろうか。

大陸の西に位置し、四大王国のひとつとして名を馳はせるトリティカーナ王国を知らないとは、考えづらいが――

「君はどこから来たの？」

「俺？ 俺は……東の、集落から来た。名前はアユムだ」

俺という一人称を聞き、アレクは思わず性別も尋ねてしまった。しかし、少女で間違いないらしい。失礼な問いかけだったかと焦ったものの、気を悪くした様子はなく、アレクはホッと息を吐いた。

「僕、アレク」

「俺はライアン！」

「……私、ユリーカ」

「シ、シオンです」

それぞれが自己紹介すると、アユムは不思議そうな表情を浮かべて言った。

「変わった名前が多いんだな」

アレクからすると、アユムこそ変わった名前だと感じる。しかし、あえてそのことは口にするまい。そう思っていたのだが、ライアンが勢いよく口を開いた。

「そっちこそ、おかしな名前だな！」

「ちよつと、ライアン！ 失礼でしょ！」

ユリーカに叱られ、シュンとするライアン。

一方のアユムは、その光景を微笑ましそうに見つめていた。

「いいんだ。名前は、地域の特色が出るものだからな。それで……この腕に刺さってる管はなんだ？」

アユムは左腕から伸びた点滴を指差し、首を傾げる。その問いかけに、シオンがおどおどしながら答えた。

「そ、それは点滴。お医者さんが脱水症状だつて」

「テンテキ……へえ。すまない、迷惑をかけた」

どうやらアユムは、点滴のこと知らないようだ。

俯うつむいてしまったアユムに、アレクは励ましの言葉をかけた。

「迷惑だなんて思っていないよ！ とにかく、助かってよかったね。アユム……さん？」

「アユムでいい。恩に着る」

その時、アユムはハッとしたように叫んだ。

「——！ おい、鈴は!?」

「え？」

「俺が頭に巻いていた、ヒモと鈴はどこだ!？」

「こ、ここよ」

アユムの取り乱しようにたじろぎながら、ユリーカが鈴のついたヒモを手渡す。

「ああ……良かった」

アユムは小さくつぶやいて、それらを大切そうに抱きしめた。

「大事なものの、なのね」

「そうだ。これは、俺の命よりも大切なものだ」

アユムが躊躇なく言い切ったため、アレク達は圧倒された。

「なあなあ！ それ、なんなんだ？」

興味津きょうみしんしん々な様子のライアンに、アユムは頬を緩めて答える。

「これは、救世主様を見つけるための鍵かぎなんだ」

何やらアユムは、ただならぬ事情を抱えているようだ。

「救世主？」

首を傾げたライアンに「そうだ」と頷いて、アユムは語り出した。

「俺の故郷を助けてくれる、救世主様を探してるんだ。俺の故郷には、魔物が封じられている。その名は、フロストキングエイプ。……巨大な人型の、氷使いの魔物だ」

「なんだそれ！ そんなもんがいるのか!？」

魔物と聞き、ライアンが身を乗り出す。アユムはゆっくりと頷き、顔をくしゃりと歪めた。

「その封印が、あと少しで解ける。魔物討伐のために、救世主様が必要なんだ」

「なるほど……じゃあ、救世主が見つかる、その鈴が鳴るの？」

ユリーカの質問に、アユムは「いいや」と首を振った。

「この鈴は——素質のある者を見つけるためのもの。こうして頭に巻いていると、俺にも救世主様の候補がわかるんだ」

そう言って、アユムは鈴のついたヒモを頭に巻いた。

深刻な様子のアユムに向かって、シオンがある提案をする。

「その、さ……今日は、英雄学園の寮に泊めてもらったらどうか？ 学園長先生は優しいから、きつと許してくれるよ」

「……だが、俺は一刻も早く救世主様を見つけないとちやならない。急がないと、故郷の皆が……」

「じゃあ、僕らがその救世主探しを手伝うよ！」

アレクが勢いよくそう言う、アユムは目を丸くした。

ユリーカやシオン、ライアンも異論はないらしい。

「……出会ったばかりの俺に、そこまでしてくれるのか？」

「そりゃ、まあ……気になるしね」

「……すまない。頼らせてほしい。実は、ここがどこかすら、あまりわからないんだ」

「アユムは、ここまで一人で来たの？」

「そうだ。俺が、集落で一番足が速いからな。一人のほうが手っ取り早かったんだ」

聞けば、アユムはトリテイカーナ王国を目指して来たわけではないらしい。

鈴の反応を見つつ、救世主を探してさまよい歩いた結果、ここに辿り着いたのだとか。

「すまない。しばらく世話になる」

そう言って、アユムはべこりと頭を下げた。その頬には、ようやく赤みが戻ってきていた。



「アユムさん、だっけ？」

「ああ。あなたが学園長か」

「うん。僕の名前は、フィース・トルシエ。変身体質でこんな姿だけど、中身は大人だからね」

学園長室を訪れたアレクとアユム。二人を出迎えたのは、子供の姿をした学園長だった。

変身体質により、毎日外見が変わるフィースだが、これでもれっきとした英雄学園の学園長だ。

アユムは、困惑を隠し切れずにつぶやく。

「へ、変身……そんな体質、初めて聞いた」

「そりゃ、そうだろうね。それで、部屋を借りたんだっけ？」

「あ、ああ」

「じゃあ、アレク君達の部屋に居候いせうこうさせてあげて。あ、君、女の子だね？　だいじょーぶ、女の子もいるから」

学園長はそう言って、アレクのほうに『いいよね』と目配せをする。

「僕はいいけど、兄様や姉様が——」

「そこは強行突破して」

さらりと言つてのける学園長だが、あの二人を強行突破すると、かなり大変だ。

アレクは思わずため息をついた。

「わかりました……」

「ん。じゃあね」

学園長室を退出すると、アユムが申し訳なさそうに口を開いた。

「すまない……本当に……俺はいろいろと迷惑をかけているな」

「そんなことないよ。いけるって」

「多分」と小さく付け加えたアレクに、アユムは不安そうな表情を浮かべた。

「に、兄様、姉様。ただいま」

寮の部屋に戻ったアレクは、ガディとエルルの機嫌を窺うかがいつつ声をかけた。

「おかえり、アレク！」

満面の笑みでアレクを出迎えた双子だったが、アユムを見た瞬間、その笑顔はスッと消える。

「……ソイツは誰だ」

また変なものを拾ってきて、とか考えているのだろう。

アレクの後ろにいたアユムは、申し訳なさそうに眉を下げた。

「こんばんは……俺の名前は、アユムといいます。しばらくお邪魔させていただきます。どうぞ、よろしく」

「どうのことだ？」

「兄様、姉様。学園長先生には、ちゃんと許可取ってあるよ」

「いや……きっちり説明してもらうからな？」

雑に話を終わらせようとしたアレクだが、ガディがアレクの肩をがっちりと掴んでそれを阻止する。

仕方なく説明しようとする、「ここは俺が」とアユムが話し出した。

東の集落から来たこと、魔物討伐のための救世主を探していること。

最初は訝うぶしげに聞いていたガディとエルルも、話が終わる頃には真剣な表情をしていた。

「なるほど、救世主ね……」

「僕も、明日から探すのを手伝うんだ」

一区切りがついたところで、アレクはお茶を淹れることにした。

人数分のお茶を淹れ、お菓子も用意して部屋に戻る。温かいお茶を差し出すと、アユムがお礼を言いつて受け取り、口をつけた。故郷のものとは味が違い、少し甘いという。

ちびちびお茶を飲むアユムに、ガデイが尋ねた。

「その鈴が鍵なんだよな。どうなってるんだ？」

「ええと……ヒノメさ〜ん。出てきて〜」

アユムは誰かの名前を呼び、ヒモをシュルンと引つ張る。すると不思議なことに、宙に浮いたヒモがするすると結び目を作っていき、やがて人の形になった。

「か、可愛い！〜」

アレクは思わず叫んでしまう。

現れたのは、手のひらサイズの少女だった。まるで妖精のようにふわふわと宙に浮き、長い髪は黒色で、毛先に向かうにつれて濃い赤色へと変化している。格好は、どこかアユムに似ていた。小さな少女は、くりくりとした瞳をアユムに向ける。

「……」

「ヒノメさん。こちらはアレクと、ガデイさん、エルルさん。俺に協力してくれる人達だよ」

「……」

ヒノメと呼ばれた少女は無言のまま、アレク、ガデイ、エルルを順に見つめた。
アレクは、アユムに向かって尋ねる。

「ねえねえ！ この子、どうなってるの？」

「ヒノメさんは、俺の鈴とヒモに宿る妖精なんだ。こうやって呼ぶと出てきて、俺の手助けをしてくれる。な？」

「……」

すりすり。ヒノメはアユムの指先に、自らの頬を擦りつけた。
幼子のようなヒノメの愛らしさに、自然とその場が和む。

「なあ、ヒノメさん。救世主様は、一体どこにいるんだろううな」

「……………」

くいつ。

「ちょ、服を引つ張らないで。伸びちゃう」

くいくいくい、くいくいくいつ。

「ヒ、ヒノメさん？」

どうやらヒノメは、何か大切なことを伝えたいらしい。アユムの服を引つ張った後、ガデイ、エルル、アレクを指差した。

「えっ…………？」

ヒノメはムフーと鼻息を荒くする。まるで宝物を見つけた時のような、自信たっぷりの反応だ。



「こ、この三人が、揃って救世主様ってこと……?」

アユムのよく響く声を聞き、アレクは驚きの声を上げた。

「えっ!？」

一方、ガディとエルルは特に驚いた様子もなく、もくもくとお菓子を食べている。

「ほ、本当に!? 僕らが、その救世主ってやつなの?」

「そうみたい……」

ヒノメはむんと胸を張ると、自分の役目は終わったとばかりに、またしゅるしゅるとヒモの姿に戻っていった。

「ま、待って、ヒノメさん! もう少し説明を——」

しかし鈴のついたヒモの姿となったヒノメは、アユムの手のひらにおさまリ、何も反応しない。アユムとアレクがぼかんとしていると、やがてガディとエルルが口を開いた。

「それで、俺らの力を借りたいのか?」

「えっ」

「私達がその救世主ってやつなら……助けてあげないこともないわ。依頼って形で受けてあげる」

「い、依頼?」

「そうよ。個人依頼ね。私とガディをそれぞれ指名する、ギルドを通した依頼。それ相応の金額はもらうけど」

涼しい顔をしてエルルが言うと、アユムは困った様子で俯いた。もしかすると、アユムの暮らす

集落には、それほど余裕がないのかもしれない。

しかし、アユムは覚悟を決めたように顔を上げて言った。

「わかりました。お支払いします」

「……用意できるの？」

「今すぐには無理ですが、必ず用意してみせます」

「ふうん」

楽しげな表情を浮かべて、エルルがニヤリと口角を上げた。ガディは持っていたお菓子をアユムに手渡し、「合格だ」と口にする。

「よし。助けてやる。金はいらん」

「はっ……でも」

「いらんと言っている」

「兄様。もともと、お金をもらうつもりなんてなかったでしょ」

アレクの指摘に、「まあな」とガディは返す。

「アレクの連れてきた奴だ。弟が拾ったものには、兄である俺が責任を持つ」

「ありがとう、兄様！ 姉様も！」

「あ、ありがとう、ございます……」

こんなにあっさり引き受けてもらえると思わなかったのか、アユムは戸惑いながらも礼を言った。

「このご恩は、一生忘れません」

「気が早いっつの」

「兄様と姉様は優しいでしょ。僕も絶対に君の助けになるから、安心してね」

アレクがそう言うのと、アユムは涙ながらに頷いた。

その日の夜。

出会った時は青白い顔をしていたアユムだったが、今は穏やかな寝息を立てている。その寝顔を見て、アレクはホッと息を吐き、眠りについたのだった。

第二話 東の集落

翌日の朝。

学園長室にて、フィースは優雅にお茶を啜っていた。

今日の学園長は、アレクと同じ年頃の少女の姿だ。重厚な椅子にその幼い姿はいまいち合っていないが、それは置いておく。

いつもなら書類仕事をしてくれと突撃してくる教師達も、冬休みばかりは静かなものである。

このまま穏やかな一日になることを願っていた学園長だったが、ふと妙な胸騒ぎを覚えた。昨日、アレクが連れてきた少女がどうも引っかかる。

厄介事の匂いがする——そんなことを考えていると、ノックもなく学園長室の扉が開いた。

そこに立っていたのは、アレクの姉であるエルルだ。

「いつも急だな、君は」

「私とガディ、アレクは救世主になったから」

「え？」

「ということで、しばらくいなくなるから、よろしく」

「待て待て待て待て待て待て」

説明不足にも程がある。

用件だけ伝えて去ろうとするエルルを、学園長は慌てて引き止めた。

鬱陶しそうな表情でこちらを振り返るエルルだが、学園長も引く気はない。エルルは観念し、仕方なく事の経緯を説明した。

「——つてことで、ちゃちゃっと集落を救ってくるわ」

「軽い！」

ちよつと散歩に出かけるような感覚で、集落を救いに行かないでほしい。

今は冬休み。好きに過ごしてもらって構わないが、魔物のいる集落へ向かうとなると話は変わる。立場上、生徒の安全を守らねばならない。

「……わかった、私も行く」

「は？」

「君らだけじゃ、集落の人に誤解されそうだからな」

「私達をなんだと思ってるの？」

「暴走無茶ぶり野郎」

「いい覚悟ね？」

割と本気の殺気を出して、短剣を構えるエルル。学園長は、「冗談だよ、冗談！ アハハ」と慌てたように誤魔化した。

「んで、その集落ってどこにあるのさ」

「確か……東？ 私が報告に来ている間に、もう準備は済んでるはずよ」

「ほう。じゃあ、私も準備せねばな」

「あ、あとアレクの友達も連れていくから」

アレクの友達というと、ユリーカ、ライアン、シオンのことだろう。

「なんで？」

学園長が首を傾げると、エルルもまた首を傾げた。

「なんでって……何が？」

「いや、あの三人は関係ないじゃん」

「ああ、アユムって奴と約束したみたいよ。救世主探しを手伝うって話だったみたいだけど、こうなったら集落を救うのも手伝うって。あと、ガディが三人を鍛えるのにちょうどいいって」

「……いつの間に、そんな師弟関係みたいになつてたの？」

「さあ？」

ガディより人当たりがいいように見えるエルル。しかし、懐なつこに入れた人物に対して甘いのはガディのほうだ。他人に深入りするつもりのないエルルに代わり、他者とコミュニケーションを取ってきたのもガディである。

ガディは、アレクが友人達を大切にしていることを知っている。アレクが必要とする以上、それを排除する気はないのだ。

「ライアンは、鍛えてほしいって乗り気みたいだけど」

「いや、ユリーカさんやシオンさんは、そうでもないだろう？」

「半分巻き込まれてるみたいなものだわ。まあ筋はいいし、大丈夫でしょう」

「……珍しいね。君が人を褒めるなんて」

「だから、私をなんだと思ってるの？」

「度が過ぎたブラコン」

「行くなら、さっさと準備しなさい」

「これには怒らないんだ」

「はあ」とわざとらしくため息をつき、学園長は腰を上げた。

◆ ◆ ◆

準備を終えたアレク達のもとに、エルルが学園長を連れて戻ってきた。

同行することになったらしく、瞬間移動で集落まで飛んでくれるという。

学園長は、集落のおおよその位置を尋ねてきた。

「東って聞いたけど、どこにあるんだい？」

「えっと……その、よくわからなくて」

「え」

「無我夢中で走ってきたから……目印になる国はわかるんだけど、そこから先は全然……」

困ったとばかりに眉尻を下げるアユムに、学園長も頭を抱えた。するとアユムの頭に巻かれていたヒモが光り輝き、ヒノメが現れた。

「なんっじゃ、そりゃあ!？」

ライアンが驚き大声を上げると、ヒノメが怯おそえた様子でアユムの後ろへと隠れる。

「え、え、今っ、ヒモが女の子に!? 魔法か!？」

「このバカッ」

「あでっ」

アユムの背後を覗き込むようにして詰め寄るライアンに、ユリーカが軽くチョップを食らわせた。ライアンが大人しくなると、ヒノメがおずおずと顔を出す。

「どうしたの? ヒノメさん」

首を傾げるアユムの服の裾を、ヒノメがぐいぐいと引っ張った。

「……」

何か言いたげであるが、ヒノメは言葉を話せない。首を傾げたままのアユムに、シオンが口を開いた。

「その、ヒノメちゃん？ その子は、集落までの行き方を知ってるんじゃないかなあ」

「え、そうなの？」

こくん！ と大きく頷いたヒノメを見て、アユムは涙目になり叫んだ。

「ヒ、ヒノメさん……！ 大好き！ 信じてたっ！」

「……！」

ヒノメを抱きしめて、頬擦りするアユム。ヒノメは嫌そうに顔をしかめて拒絶の意思を示すが、アユムは気にすることなく、学園長に向き直った。

「東の大国……ダンカート、だったか？ そこまで飛んでくれないか？」

「わかった。じゃ、皆そばに来て」

学園長に促され、アレク達は子供姿の学園長を取り囲むように立つ。

「ちょ、何、この圧迫感……苦しい……」

「ふん、なんで今日に限って子供の姿なんだ？ 一瞬でもいいから本来の姿に戻れよ」

「ガディ君？ それ、かなり魔力と集中力があるんだけど、わかって言ってる？」

「それより早くしてちょうだい」

「……君達に慈悲はないのかな？」

双子に文句を垂れつつ、学園長は瞬間移動を使ったようだ。

一瞬のうちに周りの景色ががらりと変わり、見知らぬ場所に立っていた。

「……凄いな、都会の技術は」

ぽかんと口を開けて言うアユムを見て、アレクは苦笑する。

「うーん、都会っていうよりは——」

「学園長の技術だよねえ」

アレクの言葉に続けて、シオンがそう言う。「学園長は凄いな」とアユムが言い直すと、学園長は目を輝かせた。

「わかってくれるかい、わかってくれるかい……！」

「あ、待って！ ヒノメさん！」

感動に浸る学園長だったが、すぐさまヒノメが先陣を切って飛び出した。

「……切り替え早くない？」

残念がる学園長には構わず、アレク達は慌ててヒノメを追いかけた。

「ふう、ふう、つ、疲れたあ」

「シオン、大丈夫？」

肩で息をするシオンを気遣い、アレクが声をかける。

初めのうちは順調に進んでいた一行だったが、目的地は想像以上に遠かった。一番遅れているの

はシオンだが、少し前を歩くユリーカと学園長もキツそうだ。

「ご、ごめんねえ」

シオンは汗を拭い、「大丈夫！」と力強く返した。

「私だって、頑張らなきゃ……！」

「あんまり無理しないでね？」

「行けるよ！」

シオンの張り切り具合を見て、アレクは少し意外に思った。

以前まではすぐに諦めがちというか、見切りをつけるのが早かった気がするが、最近のシオンは粘り強さを見せることが多くなった。シオンの成長を目の当たりにして、アレクはなんだか嬉しくなる。

「もうすぐ着くって！」

アユムの一言を聞き、シオンの表情が明るくなる。ユリーカと学園長も、ホッとした様子だ。

アレク、ガディとエルルはもちろん、ライアンとアユムもまだまだ元気で、足取りはそれほど重くない。

普段の学園長であれば、アレク達と同様に余裕があっただろうが、瞬間移動で力を使ったこともあり疲れているようだ。

しばらく歩き続けていると、アユムが再び声を上げた。

「……！ 帰ってきた。あれが俺の故郷だ」

アユムが指差した先には、小さな集落があった。

「長老っ、長老……！！」

集落に到着し、アユムは大声で長老を呼びながら駆けていく。

「……!? アユムか！ よくぞ戻った！」

やがて一人の老人が血相を変えて、こちらに走り寄ってくる。この老人が長老らしい。

長老はアユムの無事を確認して大きく息を吐き、後ろにいたアレク達に目を向けた。

「それで……どなたが救世主様かな？」

「あっ、えっと、この方々です」

アユムは慌てたように、アレク、ガディ、エルルを長老に紹介した。すると長老は、泣き出しそうな表情を浮かべて頭を下げる。

「急な話で、申し訳なく思っております。アユムについてきてくれたこと、感謝してもしきれませぬ。ですが、どうか我々のためにお力添えを……」

「長老さん、僕達、頑張りますんで！」

アレクがぐっと拳を握って言うのと、長老は涙を浮かべた。

「ああ、ああ、ありがとう……！」

やがて集落の者達もアレク達に気づき、集まってくる。

その時、アユムがキョロキョロとあたりを見回して長老に尋ねた。

「長老。クルミは？」

「クルミか？　そういえば、見ておらぬな」

クルミとは誰だろう。アレクが首を傾げていると、一人の少年が声を上げた。

「姉ちゃんなら、いつものところ」

「シュウ！」

シュウと呼ばれた少年は、黒髪に、桜色の瞳をしている。どうやらアユムが探している人物は、彼の姉らしい。

「帰ってきたんだな、アユム。んで、そいつらが救世主様？」

「無礼だぞ、シュウ」

アユムはそう窘めて、アレク達を紹介した。

「ふうん……」

シュウは、アレクをじろりと睨めつける。

鋭い視線であったが、直感的に逸らしてはいけなさと感じ取り、アレクはシュウを見つめ返す。

「……ま、信じてやるよ」

そう言って、その場を後にするシュウ。長老は困った様子で、アレク達に謝罪した。

「すみません。生意気な子でした」

「いいえ、気にしませんよ」

アレクに代わり学園長がそう返すと、長老は胸を撫で下ろしたようだ。

その様子を見ながら、アユムがアレクに向き直った。

「悪いが、少し抜けてもいいか？　友達が待っているんだ」

「うん。もちろん」

アレクがにっこり笑って答えると、アユムは「すまない」と短く謝り、駆けていった。



アユムは、集落を守るように鎮座する祈り石のもとに向かっていた。この石は守り石とも呼ばれており、厳重に鎖が巻かれ、集落の信仰対象にもなっている。

アユムの親友であるクルミは、いつもそこにいた。

「クルミ！」

アユムの声に反応し、小柄な少女が振り返る。シュウと同じく桜色の瞳を持つ、意志が強そうな顔立ちの少女だ。

アユムの姿を認めると、クルミと呼ばれた少女の表情はふわりと柔らかくなった。

「アユちゃん！　帰ってきたの！」

「ああ。救世主を連れてきたんだ！　これで……これでクルミは大丈夫だ！　生贄になんて、ならなくていい！」

アユムが必死になっていた理由。それはもちろん集落のためであったが、同時に、クルミのためでもあった。

この集落では、百年に一度、魔物の封印が解けるとされている。しかし救世主が見つからなかった時には、再び魔物を封印しなければならない。その際、必要となるのが生贄だ。

集落の長の家に生まれた赤子は、来るべき日の生贄として大切に育てられる。

生まれてすぐに、首にかけられる石がその証だ。これは祈り石のカケラであり、魔物の封印石として使われる。生贄となった少女の香りが石の匂いを消し、少女ごと食らった魔物がそのまま封印される——というわけだ。

いつの時代にも、救世主は現れなかったと聞いている。そのため集落は、悲しい歴史を繰り返してきた。

しかし、今回は違う。アレク達を見つけることができて、アユムは本当に運が良かった。

アユムは喜びのあまり、まくしたてるように事の経緯を説明する。そして話を聞き終えたクルミから伝わってきたのは、歓喜ではなく戸惑いだった。

「……本当に？ 救世主様が？」

「ああ、本当だ！ ヒノメさんが選んだ！」

「まさか……伝承が、本当に」

信じられないと首を横に振るクルミに、アユムは再度叫ぶ。

「クルミは死ななくていいんだよ！ これからは自由に生きよう！ ここから出ていってもいい！」

「アユちゃん」

名前を呼ばれ、アユムはハツとして顔を上げた。

一方的に喋りすぎてしまった。反省するアユムに、クルミは小さく笑いかけた。

「私のためにありがとう。まさか本当に救世主様を見つけてきてくれるなんて、思ってもみなかった」

「……ああ。絶対見つけるって、決めてたからな」

「本当に。ありがとう」

クルミの笑顔に、アユムは心底安堵した。

この少女が死なずにすむのは、何よりも喜ばしいことなのだ。



アユムと別れた後、アレク達は長老の家に招かれ、この集落に伝わる魔物の伝承を教わった。

長老の話は思いのほか長く、すっかり日が暮れてしまった。

アレクの隣に座るライアンが船を漕ぎ始めると、すかさずユリーカがチョップをして叩き起こす。幸い長老はそれに気づくことなく、話を続けていた。

「魔物の封印は、おそらくあと二日ほど解けるはずです。百年に一度——我らの先祖が施した封印の解ける日がやってきます。皆さんには、その魔物を退治していただきたい」

長老の言葉を受け、皆、真剣な表情で頷く。
何せ相手は、繰り返し封印してきた魔物だ。

SSランク冒険者であるガディとエルル、そして学園長がいるとはいえ、油断はできない。
緊張した面差しのアレクに、ユリーカが声をかけた。

「アレク君。私達もいるから、頼って」

「あ、ありがとう、ユリーカ」

「まだまだ弱いかもしれないけれど……絶対、迷惑はかけないから」

その言葉は、決意のような重みを含んでいた。

頼れる人がいるとわかると、アレクの不安も少しは軽くなる。

話を聞き終えたアレク達は、長老の家を後にし、集落で最も大きい家に案内された。

「今夜は、この家をお貸しいたします。どうぞ、ごゆっくりなさってください」

室内には人数分の布団が敷かれていて、蠟燭ろうそくの炎が頼りなげに揺れている。

「俺達はまだしばらく起きてるつもりだが、どうする？」

ガディの質問に真っ先に答えたのは、ライアンだった。

「俺はもう寝るっす！ めっちゃ疲れたんで！」

「お前、そこまでヤワじゃないだろう」

「話を聞くのに疲れたんすよ！ 難しい言葉ばっかで！」

勢いよく布団に倒れ込んだライアンに続いて、シオンも腰を下ろす。

「あ、あの、私も、そうします……」

「じゃあ、私も」

ユリーカも、シオンの隣の布団に座り込んだ。

エルルが学園長に「どうするの？」と尋ねると、学園長は悩ましげに唸うなってから答えた。

「あ……弓矢の手入れをしておこうかな。というわけで、私も、もうちよつと起きてるよ。君達は、何かするの？」

「外の様子を見てくる」

「偵察よ、偵察」

ガディとエルルが家から出ていくのを見送り、アレクもライアン達と一緒に寝ようとした時――

「失礼します」

一人の少女が家を訪ねてきた。

初めて会う少女だ。アレク達が首を捻っていると、少女はアレク達を順番に見ながら尋ねてくる。

「救世主様はいらっしゃいますか？ 話しておきたいことがあります」

「あ、僕です。残りの二人は、外ですけど……」

「そうですか。なら、あなただけでも」

「わかりました！ 行ってくるね」

「行つてらっしゃーい」

ライアン達に見送られ、アレクは少女についていく。

やがて少女が立ち止まったのは、大きな石の前だった。

アレクはその石を見て、異様な空気を感じ、思わず体を震わせる。石に巻かれた鎖が、どこか歪なものに見えた。

「救世主様……で、間違いありませんよね」

「はい」

「私、長老の孫のクルミといいます。改めてお礼が言いたくて、連れ出してしまいました。すみません」

「わざわざお礼なんて。僕はただ、アユムを助けたかっただけですから」

アレクが遠慮がちにそう言うと、クルミは儂げに微笑んだ。

「アユちゃんは……私のために頑張ってくれました。それはとても嬉しいです。救世主様が現れるなんて、本当に思ってもいませんでした」

「そんなに珍しいんですか？」

「はい。今まで一度も現れたことがなかったんです」

クルミの言葉に、アレクはひどく驚いた。

「どうか、この集落を救ってください。お願いします」

「……はい、任せてください」

アレクはクルミと改めて約束を交わし、家へと戻っていった。



——アレクのいなくなった祈り石の前で、クルミがふいに口を開いた。

「……これで満足？」

ザワリと空気が揺れ、祈り石の後ろから人影が現れる。少年にも少女にも見える、中性的な外見の子供だ。

子供はクルミに向かって返事をする。

「うん。あいつのこと、ずっと見てみたかったから」

その言葉に、クルミは小さく眉根を寄せた。

「救世主様が現れるって、もともとわかっていたの？」

しかし、子供はクルミの問いには答えず、さらなる問いで返す。

「……ねえ、おかしいと思わないの？」

「何が？」

子供はクルミのすぐ前にやってきて、言葉を続ける。

「あれが本当に救世主だと思う？」

「どういふことよ」

「救世主は、紫の髪と瞳をしてるって言われてるんですよ」

「……」

確かに集落の言い伝えによると、救世主は紫色の髪と瞳を持つとされていた。しかし、先ほど連れ出したアレクの髪と瞳は、金色である。

言い伝えと異なる色に戸惑いはしたものの、アユム——もといヒノメがそうであると判断したのなら、間違っではないだろう。

「別に。ヒノメ様が言うなら、そうなのよ」

「本当に？ あれが本当にそうだと？」

「何が言いたいのか？」

「あの救世主さあ、偽物なんじゃないの？」

クルミが言葉を失うと、子供は愉快そうに口角を上げる。

「怪しいじゃん。そもそも三人いるっていうのがおかしい。仮に本物だったとして、出来損ないが正しいじゃない？」

「……やめて」

「ボクは、あいつのこと気に食わない。それに、この集落を救えるとも思わない」

「やめてってば」

「しかもさ、君は生贄としての存在意義すら奪われるんだよ」

「やめろ！」

畳みかけるように言う子供に向かって、クルミは思わず叫んだ。

眼光鋭く子供を睨むが、子供はおかしそうに笑って首をすくめた。

「そんなに大声を出さないでほしいんだけど？ ボクは、君のことを思っ言ってるのに」

「嘘つかないで。クルミのことなんて、微塵も考えてないくせに！」

「嘘じゃないさ」

クルミは舌打ちをすると、子供に背を向けた。

「この話はおしまい。私も、もう戻る」

「そっ。じゃあ明日ね」

返事もせずに去ろうとするクルミに、子供は言い募る。

「困ったらいつでも来てよ。力になってあげる」

「っ！」

すぐ耳元で声が聞こえた気がして、クルミは勢いよく振り返る。しかし子供の姿はとつくに消えていた。

「……最悪」

悪態をついたクルミは端整な顔を歪ませ、今度こそその場を後にした。

第三話 アユムとクルミ

翌朝、集落を大雪が襲った。

昨日までは天気がよかったというのに、起きた途端、あまりの寒さにアレクは驚いてしまった。
「凄い……吹雪だ」

家の扉を開けて、アレクは小さくつぶやく。

「救世主様。おはようございます」

その時、長老がアレクに声をかけた。どうやら散歩中だったらしい。

「おはようございます」とアレクが返すと、長老は空を仰いだ。

「もうすぐフロストキングエイプの封印が解ける……その前兆なんでしょうなあ。ここ最近、天気が不安定でして」

「そうなんですか」

「この気候には、集落の皆が悩まされております。作物も全部ダメにされました。しかし、救世主様がおられるのなら安心ですな」

そう言って朗らかに笑う長老に、アレクは期待の重さを実感した。

失敗したらどうしようという不安もあるが、兄や姉、友人、学園長まで揃っているのだから、最悪の事態にはならないだろう。

「へっぶし」

寒さでくしゃみをしたアレクに、慌てて長老は言った。

「申し訳ございません。暖かいお召し物をお貸しいたしますので、どうぞついてきてください」

寒さに凍えながら長老の後をついていく。昨日も訪れた長老の家に着くと、すぐにクルミが顔を

出した。

「おじい様、おかえりなさい……あ」

アレクを見て、クルミは僅かに目を見開いた。

どこことなく気まずさを感じて苦笑いするが、長老は気にせずクルミを促した。

「お客様の人数分、上着を用意しておくれ。この大雪では風邪を引いてしまう」

「わかりました。どうぞ、上がってください」

「お言葉に甘えて……」

アレクが家に上がると、アユムとシュウが揃って眠っていた。

この集落の家は、部屋が壁で区切られていないようだ。大きな一つの部屋で、每晚雑魚寝しているのだろう。

ベッドで寝ることに慣れているライアンとシオン、ユリーカは、昨晚、背中が痛いとしきりに訴えていた。

「アユちゃん、シュウ。起きて。救世主様よ」

「うーん……姉ちゃん？」

「まだ、あと五分」

シュウはあっさり目覚めたものの、アユムはなかなか起き上がらない。布団から出てくる気配のないアユムを、シュウが思い切り蹴飛ばした。

「うええええ!!」

「ええ……」

アユムの叫び声と、その起こし方はないだろうとドン引きしたアレクの声が重なる。

そのままアユムはアレクの足元までゴロゴロと転がり、ようやく目覚めた。

「アレク！ おはよう！」

「おはよう、アユム。その……怪我してない？」

「平気だ！ 毎朝こうやって起こされているからな！」

アユムの発言に驚き、アレクは思わずシュウを見る。するとシュウが呆れた様子でつぶやいた。

「そうやって起こさないはずと寝てるんだよ、コイツ。俺、悪くないし」

そっぽを向いたシュウに、「そんなことないし！」とアユムが食ってかかる。しかし、シュウは意地悪な表情を浮かべて言葉を続けた。

「本当に？ 今まで姉ちゃんの優しい起こし方で、起きられたことがあったか？」

「うっ」

「ないだろ？ おまけに俺が蹴っ飛ばさない限り、昼過ぎまで寝てたじゃん」

「うう……」

「異論は？」

「ございません」

仲の良い二人のやりとりを見て、アレクは微笑ましくなり「フフ」と笑った。

それに気づいたシュウが、「何、笑ってるんだよ」と刺々しく言う。

「いや、姉弟みたいだなあって」

「はあ？ 俺がコイツと？」

「まあ、それに近いからな」

シュウは嫌そうだったが、アユムはそうでもないらしい。そんなアユムに、シュウは厳しく言う。

「誰がお前と姉弟だ！ 俺の姉ちゃんは、クルミ姉ちゃんだけだ！」

「わかってるってば」

「……シュウ。そんなこと言わないで」

そこで、クルミがたくさんの上着を抱えて戻ってきた。

アレクの前までやってくると、それらの上着を手渡してくる。

「どうぞ。見た目より重いので、お気をつけて」

「大丈夫です！」

受け取ると、確かにそこそこの重量だったが、このくらいなら平気だ。

ひとまず床に置かせてもらい、そのうちの一枚を羽織る。クルミやアユムが着ているものと同じ

デザインで、赤い刺繍が魅力的な服だ。

「こういう意匠いしやうはあまりみないから、なんだか新鮮だなあ」

アレクが思わずつぶやくと、アユムが嬉しそうに口を開いた。

「俺達の集落の特産品みたいなものだからな！ まあ、お客さんなんて来ないけど」

「私達しか着てませんしね」

「あったかいだろ。えーっと……なんちゃらボアの毛を使ってるんだ」

「コールボアな」

アユムの説明に、すかさずシュウが補足する。

三人のやりとりは軽快で、友達のような、姉弟のような温かさを感じた。

アレクと双子とはまた違った関係性だが、見ているこちらが穏やかな気分になれる空気だった。

「さっき姉弟に近いって言ってたけど、幼馴染おとななじみみたいな感じなのかな？」

「あー、俺、小さい頃からこの家で暮らしてるんだよね。親が死んじゃってさ」

「……ごめん」

「気にしないでよ。今はもう慣れちゃったし。父さんと母さんは強かった。俺の家はさ、ヒノメさんを守ってきた家なんだ。ヒノメさんは守り神みたいなものなんだけど、魔物を惹ひきつけちゃうみたいで……それを守って、二人とも死んじゃった。父さんも母さんも、強かったのにな」

アユムは明るく言うが、両親を懐かしむその瞳には、寂しさが宿っている。アレクは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「……」

「落ち込んでた俺に声をかけてくれたのが、クルミだったんだ。シュウはクルミのことが大好きだったから、取られると思って、俺のことを歓迎してなかったけど」

「おい」

「事実だろ」

シュウは何か言いたげであったが、恥ずかしげにそのまま俯いた。言い返すことができなかったシュウを見て、アユムは得意げに笑う。

「コイツ今も捻ねくれてるけど、昔はもーっとひどかったんだぞ」

「っ、アユム!!」

「あはははははっ！ これ以上言うとな本当に怒られるから、この辺で。とにかく、昔から二人とは一緒だったんだ。集落の皆は優しくったし、長老も身寄りのない俺を引き取ってくれた。この集落に恩返しをしたいって、ずっと思ってたんだ」

そこでアユムは、一度口を閉じた。すぐにまた話し出したが、それまで優しくだった声音に、緊張の色が混じっている。

「でも、封印の話が出た。クルミが生贄になるのは、嫌だった。だから俺は、救世主様を探しに出たんだ。集落で一番足が速いのは、俺だから。本当は、学園長の瞬間移動みたいに魔法が使えたらよかったんだけど……俺らは魔法が使えないんだ」

「俺らってことは、他の人も？」

「うん。この集落の人は、魔法が使えない。だから、アレク達とは全然違う暮らし方をしてる」
アユムはアレクの手をギュッと握り、絞り出すように言った。

「アレク達を見つけた時、本当に安心したんだ。倒れた俺を助けて、看病してくれたのもアレク達だ。感謝してる。ついてきてくれて、ありがとう」

「……いいんだよ。倒れていたところを助けたのはユリーカとシオンだし、僕だって放っておけな

かった。皆優しいから、無視なんてできないよ」

「うん……うん。ありがとう！ でも、ごめん。こんな危険なことを任せるなんて、いくら救世主様でも迷惑だよな」

「大丈夫だって！ 兄様や姉様は強いんだから！ 僕だって、ちょっとは頼れるんだよ？」

アレクの言葉に、アユムの瞳が揺らいだ。今にも涙がこぼれそうな澄んだ瞳は、綺麗な緑色に光っていた。

「ごめん……ありがとう。明日は頼んだよ」

「うん。任せて！」

アレクが元氣よく返事をした時、ノックの音が響いた。ドアを開けてみると、白い息を吐くユリーカの姿があった。

「あまりに寒いので、防寒具を借してただけ——って、アレク君？」

「ユリーカ！ ちょうどよかった！ これ、上着を借りたんだ！」

「わっ、ありがとう」

ユリーカはさっそく上着を受け取って袖を通し、ホッと息を吐いた。よほど寒かったのだろう。

彼女の話によると、シオンも凄く寒そうにしており、学園長は鼻水がヤバいらしい。ライアンのは見えていないそうだが、どこかに出かけたのだろうか。

「アレク君、いったん戻りましょう」

「そうだね。アユム、クルミ、シュウ！ 僕、もう行くね！」

「わかった！」

「また足りないものがあれば、言ってくださいね」

「じゃあな」

アレクとユリーカは皆の上着を抱えて、長老の家を後にした。先ほどは吹雪^{ふぶ}いていた雪も、ようやく落ち着いたようだ。しかし、寒いものは寒い。

それからしばらく歩いていくと、何やら騒がしい場所を見つけた。

「何あれ」

「んー？」

人々が一ヶ所に身を寄せ合っている。気になって近寄ってみると、ユリーカがギョツとしたような声を上げた。

「え、ライアン？ どうしたの……って、ああ、そういうことね」

「おー！ ユリーカにアレク！」

なんとライアンを中心に、人だかりができていた。何かしでかしたのかと思ったが、どうやら違うらしい。

ライアンの横には、召喚獣のタイショがいる。

タイショは炎を操る召喚獣なので、体温がとても高い。そのタイショが火を焚^たいてくれたようで、ライアンとタイショの近くはじんわりと暖かくなっていた。

「ありがたいなあ。この大雪の中、火は貴重だ」

「ありがとうございます、救世主様！」

人々から口々に礼を言われ、ライアンは困ったように答える。

「俺は救世主じゃないぞ」

一方タイシヨは、火を操りながら興奮した様子だ。

「ライアン。知らない人間がたくさんいる」

「俺達、この集落を助けに来てるからな！」

「？ おう！」

いまいち噛み合っていない会話に、タイシヨは首を傾げている。しかし、とりあえず笑顔で頷くことにしたらしい。

「あ、それ上着？ もらっていい？」

「どーぞ」

ライアンはアレクから上着を受け取り、笑みを浮かべた。

「あったけえ。あ、でも集落の人達も、皆これ着てるよな？ こんなにあったけえなら、別に俺いらなくね？」

「まあまあ、いてあげてよ。ライアンとタイシヨがいると、もつとあったかいからさ」

アレクがそう言うのと、ライアンは勢いよく頷いた。

「そうか、わかった！」

ライアンには無事、上着を渡すことができた。残すはシオンと学園長、ガディとエルルだ。双子

はともかく、シオンと学園長が心配である。

アレクとユリーカは、急いで家に戻った。

家の扉を開けて中へ入ると、シオンと小さな子供が光る玉のようなものを囲んでいた。

「あ、アレク君！ 上着をくれーっ！」

小さな子供がアレクのもとに駆けてくる。

どうやら今日の学園長は、いつにも増して幼い子供の姿のようだ。まだ五歳ほどだろうか。

「えっと、学園長ですよね？」

「そうそう！ こんな姿だけじゃねっ！」

アレクから受け取った上着を羽織る学園長だが、サイズが大きくてぶかぶかだ。袖や裾を引きずってしまっているが、学園長は気にした様子もなく、ありがたそうに微笑んだ。

「シオンも、これ」

「わあ、素敵！ ありがとうございます、アレク君」

「僕は借りてきただけだから。クルミがこれを用意してくれたんだ」

「クルミって……もしかして、昨日家に来た子？」

「そうそう。ところで、そんなに？」

ふよふよと浮かぶ光の玉をアレクが指差すと、学園長が自慢げに答えた。

「ふふん！ 私が開発した魔道具だよ！ 光るしあったかいし最高！」

「燃費は悪いみたいですけど……」